



ハルの初恋。

作 モカ × 絵 Nanaha



ながいながい冬が終わるころ暖かい日差しと共に優しい風が吹く。

桜並木を春風が通り過ぎると枝の先に付いた丸く今にも弾けそうなくらい膨らみピンクに色づいた蕾が封を切るように咲いて行きその甘酸っぱい花の香りを風が運び動物や虫達に春を知らせて行くのです。皆、春が来たことを歡び今年もいつもの春がやって来るのだと思っていました。春風が一仕事終え桜の木の枝の上で休んでいると、どこからか歌声が聞こえてきたのです。澄んだ歌声は、冬の乾いた空気をゆらし桜並木に響き渡ります。春風は、歌声にうっとり聞き入っていました。とても優しく美しい歌声。こんな素敵な歌を歌う人は誰だろと春風が木の下を見下ろすと、一人の少女が歌を口ずさみながら春風の前を横切っていったのです。歌声の主はとても可愛らしい少女でした。

太陽の光を反射し黄金色に染まった髪は軽く緩かなウェーブを描き頬をほんのり紅く染め風に髪をなびかせるその姿はとても愛らしく春風は少女から目を離すことが出来なくなっていました。人を美しいと思ったことはこれが初めてで胸の辺りが痛むのです。春風は、少女の後ろ姿をずっと見えなくなるまで眺めていました。

桜並木の直ぐ側に老婆が独りで営む小さな冴えない変わった喫茶店がありました。とても古ぼけた建たずまいのお店で馴染み客といえれば決まって変わり者ばかり、老婆が店の前を箒を持って掃除する姿は本当に魔女のよう老婆も変わり者だったのです。そんな老婆の店にまた変わった客が訪ねて来たようです。扉を叩く音がしたため

「扉は開いてる、勝手に入っておいで」

と老婆が言いますが誰も入って来ません。扉を叩くばかりなのです。

「やれやれ」

と老婆は重い腰を上げると扉を開け外を見渡しますが誰の姿もありません。

「あれ、可笑しいね？」

と老婆は首を傾げます。

「ここだよ、お婆さん！！」

と声が老婆の足下から聴こえてきたのです。下を見下ろすと、そこには小さな一匹の青ムシが老婆を見上げていました。

「これは驚いた、人の言葉が分かる青ムシなんて！！」

と言いながら手の平に乗せた青ムシを老婆は物珍しそうに眺めます。

「ちょっとお婆さん僕の話聞いてる！？」

「なんだい！偉そうな青ムシさん人にもものを頼む時は謙虚じゃないといけないよ」

と老婆はニヤニヤ笑いながら言います。青ムシは慌てて

「うっ、分かったよお姉さん」

と青ムシは言い直します。

「おーほほほ！なんだい可愛い青ムシの坊や」

「春がこないんだよそれで、皆困ってるんだ！！」

「何言ってるんだい坊や、カレンダーを見てごらんよもう春に決まってるじゃないか桜ももう満開で」

と老婆が窓の外を見ると桜の木には雪が積もり地面は一面まだ真っ白で風は冷たく春が来た様子はありません。

「こっこれはどういう事だい！！」

と老婆は、窓から身を乗りだし驚きを隠せないようでした。

「お婆さんいつから外に出てないの！？」

と青ムシは呆れます。老婆は、慌ててコートを着こみ胸ポケットに青ムシを入れると春風を探しに雪が降るなか外に出掛けて行きます。

「おーい！春風やー！！」

と何度も老婆が呼びかけても返事は返って来ません。老婆が叫び疲れとぼとぼと桜並木を歩いているとポケットから顔を出した青ムシが突然叫びます。

「あついた！！」

春風は、桜の木幹に寄りかかり時々ため息を付ながらぼんやりと空を眺めていたのです。

「何やってるんだいあの子は？」

「さあー？」

と二人は首を傾げます。

「ちょっとあんた！仕事もせずに何やってるんだい！？」

と老婆が春風に声を掛けます。春風はゆっくり顔を上げると

「お婆さん僕、病気みたいなんです。彼女を見てからとても胸が苦しくて頭がぼんやりするし心臓の鼓動が激しいこんなの初めてでどうしたらいいか何か良い薬を知りませか？」

と虚ろな瞳で真剣な表情をし老婆を見るのです。

老婆と青ムシは、驚きのあまり顔を見合わせワッハハと大笑いします。

それを見た春風はムッとしました。

「僕は、真剣に悩んでいるんだ！馬鹿にするならあっちに行ってくれ！！」

と顔を真っ赤にし背を向けてしまいます。

「こりゃ悪かったね春風さん、でも私はあんたの病を知ってるよ」

「僕は、何の病気なんですか！？」

「それは、恋の病さ！」

「恋！！」

と春風は首を傾げます。

「そうさ！とっても厄介な病気でね薬では治らない大病さね」

「なんだって！じゃ僕はこれから一生このままてっこと、こんなに胸が苦しくて死にそうなの！！」

と肩を落として嘆きます。

「仕方ない子だよ、風が恋するなんて本当に好きなんだねその子のことが」

「お婆さん僕、可笑しいですか？」

「いや私は、とっても素敵だと思うよ」

と言う老婆の言葉を聞いて春風はほっとしやっと笑顔になります。

春風は、今まで経験したことがない自分の気持ちが何なのか分からないことが不安で辛かったのです。でもどこか愛しいのは何故なのか不思議でした。

「でも困るんだよ、いつまでも春が来ず桜が咲かないと花見客が来なくて商売にならないからね。仕方ないね」

と老婆はどこからか星の形をしたペンダントを取り出し春風に手渡しました。

「これは？」

「それは願い星、神様の落とし物だよ。願った者の望みを一つだけ叶えてくれるけど対価と引き換えだけどね」

星は、静かに春風の手のひらの上で輝きます何かを待っているかのように……。

「どうする？恋する春風さん」

「僕の願い……、僕には叶えたい願いがありますお婆さん星をお借りします」

と春風は首にペンダントをかけると星を握り締め瞳を閉じ願います。

さあ、願いを……

「僕の願いは、あの子に会って話してみたいそして思いを伝えたいんだ、この切なくて愛しい今にも張り裂けそうなこの思いをあの子へ……」

星は願いを聞くと

あなたの願い叶えましょう対価と引き換えに……

と静かに囁いた後、瞬きすると光を放ち春風を包み込んだのです。光が消えた後には春風の姿はありませんでした。





春風が目を開けるとそこには、雪化粧した赤い屋根が印象的な小さな家が建っていました。

「ここは・・・」

と春風が呟くと白い息が、雪が降る寒い冬の夜まだ春は来ません。

春風が扉の前に立ち尽くしていると突然家の扉が開きあの少女が姿を現したのです。

「あら、お母さんじゃなかったみたいお客さんかしら？」

と言い少女は春風に微笑みます。春風の寒さで紅く染まった頬がよりいっそう紅くなります。

「あら、あなた顔が赤いわよ熱でもあるんじゃない？良かったらお茶でもいかが温まるわよ」

と言うと返事も聞かずに少女は春風の手を引き部屋に招き入れたのです。

部屋の中は、暖炉に火が灯りととても暖かくシチューの良い香りがただよっていました。

その香りに誘われて春風のお腹の虫が鳴ってしまいます。

クスクスと少女は笑います。また、春風の頬は真っ紅に染まってしまいます。

「あら、ごめんなさい良かったら一緒にどう？」

春風は、コクコクと頷きます。憧れの少女を目の前にして言葉が出ないのです。そんな様子を見て少女は心配そうに春風の顔を覗き込むと自分の額を春風の額に重ねたのです。

「熱は無いみたいだけど？」

と少女が言い離れたと同時に春風の頭が沸騰し機関銃の蒸気のように煙が上がります。

「やっぱり、変ね!？」

と少女は首を傾げます。

「私の名前は、ニノあなたは？」

春風は、大きく息を吸い深呼吸します。ドキドキしている鼓動を抑え答えます。

「ぼっ僕は、はっハル！ハルって言います」

少女は微笑むと春風の手を取り

「やっとしゃべったわね！よろしくねハル」

春風の瞳に映る少女の笑顔はとても輝いていました。夢にまでみたあの子が目の前にいて自分の名前を呼んでいる事実に胸踊らせていたのです。夢のような現実には春風は、浮かれ星との約束を忘れかけていました。いつも独りで世界を旅して来た春風にとって誰かと過ごす時間は、とても幸せな時間でした。ニノといると今まで感じた事がない感情が込み上げてくるのです。隣に彼女がいるだけで何気ない事でも心が踊ります。春風はこのまま時間が止まってしまえばいいと思わずにはいられませんでした。

シチューを食べ終えふと春風が顔を上げると知らない少年が窓ガラスに写っていました。これが僕?! と春風は驚きます。何故、ニノに自分が見えるのか不思議に思っていました。星は春風を人にしたのです。

「どうしたのハル？あらまた雪が降っているのね」

とニノはため息混じりに言うと窓の前に腰掛け外を憂うつそうに眺めます。暖かい部屋の中と違い窓の外では時期外れの雪が世界を白く染め上げていました。

「雪は、嫌い？」

と春風はニノに上着をそっと掛けながら聞きます。

「嫌いよ、だってニノを独りにするもの・・・」

とニノは両腕に顔を埋めながら言います。ニノの家は、父、母、ニノの三人家族で母は学校の先生をしています。雪が降る日は生徒達を家に送り届けてから帰宅するため帰りが遅くなるのです。父は、冬の間仕事を求め山のふもとにある町に出稼ぎに行き冬の間は帰って来ません。ニノは、雪の降る夜はいつも独り家で母の帰りを待つのです。それはニノにとってとても心細く淋しい時間でした。

「でもきっと、明日には雪がやんで春がやって来るはだって明日は・・・」

春風は淋しそうなその背中を覆い包むように抱きしめます。どうしようもないくらい愛しくて切なくて慰めたくて・・・。でも、春風は知っていました彼女の願いは叶わないことを・・・。春風は、そっと優しい嘘を付きます彼女を傷つけないようにこれ以上悲しませないように。

「春は来るよ、きっと・・・」

何かが違って来ていました。春風は思います、これが僕の願いなのかと。





ニノの母が帰って来た時にはもう明け方近くなっていました。

「ごめんねニノ」

と母はニノが眠っているベッドを覗き込みます。

「まあ、独りじゃなかったのね」

ベッドには、ニノと春風が仲良く並んで眠っていました。

「あれ、お母さんお帰りなさい」

とニノは母の顔を見ると飛び起き母に抱きつきます。

「ニノ、その子は？」

「ハルって言うのよ、一緒にいてくれたの」

「そうなの、どこの子かしら？」

ニノが窓の外を見るとまだ外は暗く雪が降っていました。

「お母さん、お父さんは一緒じゃないの？」

「ニノ、お父さんは今日は帰って来れないは諦めなさい」

ニノは両手をギュッと握り締めると

「嫌よ！！約束したのよ私の誕生日には帰って来るって、きっともうそこまで来ているわ」

と言うとニノはコートを羽織まだ暗く雪が降る外に飛び出して行ってしまったのです。

騒ぎで目を覚ました春風もニノを追って行ってしまいます。

「二人とも待ちなさい！！」

母が追い掛けますが吹雪のせいで視界が悪く二人を見失うなくなってしまいます。

春風は、ニノを探して桜並木まで来ていました。辺りを探しますがニノの姿はありません。そんな時に誰かが春風の耳元で囁きます。

あそこだよと

「ありがとう北風さん」

春風が雪の斜面を滑り降りると、そこにはニノが冷たい雪の上に倒れていました。

「ニノ！大丈夫！？」

春風がニノを抱き寄せると、とても体が冷たくなっていました。

「ハル来てくれたのね、ありがとう。ご免なさい急に飛び出したりして、分かっていたのお父さんが帰って来れないことは、でも我慢出来なかった。とても独りで待つ夜は淋しくて心細くて、そんな時にハルが来てくれて私とても嬉しかったハル大好きよ」

ニノは、限界だったのです。終わらない冬もやまない雪も色の無い世界もニノを酷く孤独にしたのでした。春風は、ぎゅっとニノを抱き締めます。

「ニノ、僕も君が大好きだ。お父さんが居なくても君には僕がいるもう独りになかさないからだからもう悲しまないで」

「ハルはとても温かくて優しくて本当の春みたい、でもきっと皆で過ごす春はもっと素敵よ今年
はハルも一緒だからもっともっと素敵になるわ」

「ニノ、ニノ、ニノ・・・」

と言う春風の瞳から涙がこぼれ落ちニノの頬を濡らします。ニノはそっと春風の顔に触れると
「ハル泣いているの私のために・・・」

「僕の願いが君を苦しめている。君の悲しみは僕のせいだ僕が君の側にいると君の願いは叶わ
ない」

「何を言っているか分からないハル？」

とニノは心配そうに春風を見ます。

「僕は、君の歌声が好き、風になびく綺麗な髪が好き、少しわがままな所も愛しいでも一番好き
なのはキラキラ輝く君の笑顔。だけど僕だけものじゃなかったきっと見た人皆を幸せにする魔法
だから、だから僕の願いは叶わなくてもいい」

春風の対価それはニノの笑顔だったのです。こんなはずじゃなかったのに、ただ君の側に居たか
った。君を愛したかった。そして、愛されたいと夢を見た。でも、僕の願いは叶はない僕の願い
は愛しい人を不幸にする。春風は涙を拭くと

「願ってニノ、君の願いはきっと叶う。さあ瞳を閉じて願って・・・」

「ハル！？」

ニノは少し戸惑った様子でしたが、春風の言う通りに瞳を閉じ願います。そうすると春風の胸の
辺りが輝きだし星が現れたのです。星はまた囁きます。

願いを叶えましょう。対価と引き換えに・・・

ニノが願い終わるととたんに星は弾け飛び風がニノを包み込んだのです。その風は、優しくとて
も暖かく懐かしい春の風でした。不思議とニノの瞳から涙がこぼれ落ちます。春風が、森や林、
町を駆け抜けて行きます。すると木々は目を覚まし草花が咲き乱れ桜並木も花が咲きピンク色に
染まって行きました。その花の香りに誘われ虫や動物達も目を覚まします。花の香りはニノの
に届きニノが目を開けるとそこは辺り一面に色とりどりの花が咲き乱れニノを包み込むようにして
咲いていました。そこには、ニノがずっと待ち望んでいた春がありました。でも、そこに春風は
居ません。ニノの願いを叶えるために春風はまた旅に出たのです。自分の願いを叶えるためにニ
ノの笑顔を取り戻すために・・・

「ニノー！！」

と誰かが叫んでいます。仲良く手を繋ぎニノに近づいてくる人影が見えます。ニノは

「お父さん！お母さん！」

と叫びます。

「ただいまニノ」

と父は、ニノを抱き締めました。

「ごめんニノ、淋しい思いをさせたね。それにプレゼントを買いそびれてしまってね」

「いいのよ、私とっても素敵なプレゼントをもう貰ったから」

とニノは花畑を指差し微笑みます。ニノは雲一つない澄みきった空を見上げると

「ハルー！！ありがとう！！」

と春風に届くように叫びます。きっとまた会える、また来年の春に会いましょうと思いを込

めて。

古びた喫茶店を営む老婆の所にも春がやって来ていました。老婆は窓から見える桜の花を見て「あらまあ、桜が咲いてる。あの子もう行ってしまったんだねまた、独りで・・・」そんな時に老婆の横を一羽の蝶が通り過ぎて行きました。

「お婆さんありがとう」

と言い空に羽ばたいて行きます。

「まあ、青むしの坊や綺麗になって行ってらっしゃい春風によろしくね」

そう、春風は最初から独りではなかったのです。きっとパーティーのように賑やかで楽しい旅になるでしょう。だって春は、皆の誕生日なのだから。



あしがき。



お久しぶりですモカです！！久々の更新になりました◎

「ハルの初恋。」を読んで頂きありがとうございます。この作品は、水没した携帯に入っていたものです。

旅行前に携帯水没、悲惨でした。うる覚えの文章をなんとか書きおこしたしだいです。

読んでほっとして頂けると嬉しいです***。

ご意見、ご感想お待ちしております。

モカ





ハルの初恋。

<http://p.booklog.jp/book/26529>

著者：モカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/retoropot/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26529>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26529>

